

国土審議会北海道開発分科会第8回計画部会

令和5年5月22日

【増田総務課長】 定刻となりましたので、ただいまから、国土審議会北海道開発分科会第8回計画部会を開会いたします。

私は、当部会の事務局を担当いたします、北海道局総務課長の増田でございます。議事に入るまでの間、事務局で会議の進行を務めさせていただきます。

当部会は、特別委員7名、専門委員16名の計23名で構成されております。本日の会議はオンライン形式を併用して実施しておりますが、国土審議会令に定める定足数を満たしておりますことをご報告申し上げます。

本日の議事についてでございますが、国土審議会運営規則の規定により、原則として会議及び議事録を公開することとしております。このため、事前に傍聴を希望された皆様にはオンラインで、一部の報道関係者には会議室で傍聴いただいておりますが、報道関係者によるカメラでの撮影は、円滑な議事のため、議事に入る前の冒頭のみとさせていただきます。

また、議事録につきましては、後日、委員の皆様にご確認いただいた上で、発言者氏名入りで公開させていただきますので、あらかじめご了承くださいませようお願い申し上げます。

なお、ご発言に当たってはチャット機能を活用させていただきますが、その内容についても原則、議事録に収録させていただきますので、併せてご了承ください。

本日の配付資料については、議事次第に記載のとおりとなっております。委員の皆様には、事前に電子メールにより送付させていただきます。傍聴の皆様につきましては、当部会のホームページに資料一式を掲載しておりますので、必要に応じてご参照ください。

なお、通信環境によるトラブルが生じた際は、事務局の判断により、一度会議の進行を中断させていただく場合がございますのでご了承ください。

委員のご紹介につきましては、時間の都合上、資料1の計画部会委員名簿をもって代えさせていただきます。

なお、中嶋委員及び長谷山委員におかれましては、途中でご退席となる旨、お聞きしております。五十嵐委員、小笠原委員、越塚委員、高橋清委員、高村委員、二村委員、吉岡委員におかれましては、所用によりご欠席との連絡をいただいております。

なお、欠席される越塚委員、高橋清委員、吉岡委員からは事前にご意見をいただいております、内容については出席者にお知らせしているほか、議事録にも収録させていただきます。

次に、国土交通省の出席者についての紹介ですが、出席者の皆様に事前に送付しております出席者名簿をもって代えさせていただきます。

ここで、部会の開催に当たりまして、北海道局長の橋本から挨拶申し上げます。

【橋本北海道局長】 橋本です。本日もご参加ありがとうございます。

1月30日に第7回目の計画部会を開催させていただきました、4か月ぶりの開催になります。この間、年度も変わり、2月22日に、これまでの議論を基に、次期計画の策定について正式に国土審議会に諮問させていただきました。これを受ける形で3月9日に分科会を開催していただくと共に、4月27日に国土審議会の永野会長のもとへお伺いして、調査審議状況の説明等を行ったところであります。

なお、前回まで「新たな北海道総合開発計画」と呼称してまいりましたが、今回から9期計画と呼称させていただきます。また、整理させていただいた計画素案を基に、拙文ではありますが、「前書き」として意気込みを述べさせていただいているところです。その他様々な点について事務局からご説明させていただきますけれども、本日もどうぞご議論とお導きをよろしくお願ひしたいと思います。

以上でございます。

【増田総務課長】 報道関係者の皆様によるカメラ撮影はここまでとさせていただきますので、よろしくお願ひいたします。

では、これ以降の議事進行につきましては、真弓部会長にお願ひしたいと存じますので、よろしくお願ひいたします。

【真弓部会長】 ただいまご紹介いただきました部会長の真弓です。本日、委員の皆様には、大変ご多忙の中、会議にご参加いただき、誠にありがとうございます。限られた時間がありますので、円滑な議事進行にご協力いただきますようお願い申し上げます。

早速でありますけれども、議事に入らせていただきたいと思います。本日の議題は、第9期北海道総合開発計画に関する計画部会報告、こちらの素案についてであります。当部会におきましては、これまで7回にわたって新たな計画に関します調査審議を進めてまいりましたが、本日より新たな計画につきましては、第9期の北海道総合開発計画として計画本文の調査審議に入っております。先に取りまとめました中間整理につきましては、3月に開催されました北海道開発分科会において私のほうから報告させていただき、分科会の場

でご審議をいただいたところであります。

また、前回の部会以降、国土交通大臣からの諮問と北海道開発分科会への付託がなされたほか、道内では地方公共団体や経済団体などから計画に関するご意見を幅広く伺っております。これらにつきまして、後ほど事務局から説明いただきます。その後、皆様から計画部会報告の素案に対するご意見を頂戴したいと思います。

それでは、事務局から説明をお願いいたします。

【米津参事官】 参事官の米津でございます。今年度、いよいよ計画本体を作り上げる年になりますので、引き続き委員の皆様、ご指導をお願いいたします。

それでは、資料を共有いたします。少々お待ちください。

こちらは資料2になります。まず、第7回以降の動きについてご説明させていただきます。先ほど橋本と真弓部会長からもお話がございましたが、1月30日の第7回計画部会でいただいたご意見を基に修正いたしまして、3月9日に北海道開発分科会を開催し、そこに中間整理の内容をお諮りしております。これも先ほどお話がございましたけれども、その前段におきましては、法律等に基づいて国土交通大臣から国土審議会長に計画策定に関する諮問が行われていますのと併せて、国土審議会長から北海道開発分科会長に計画策定の付託がなされております。

並行いたしまして、今年の1月から3月にかけて、北海道において地方公共団体の皆様ですとか、地域で活躍されている多様な方々との意見交換を行ってございまして、本日の部会に用意いたしました素案に反映させていただいたところでございます。

本日、この後にご説明いたします素案に対しましてご意見をいただいて、修正したものを7月の第9回部会、その部会が最終回になろうかと思っておりますけれども、こちらにお諮りして、再度ご審議いただきたいと思っております。その後、パブリックコメントを挟みまして、2回ほど北海道開発分科会を開催し、令和5年度内に閣議決定までこぎつけたいと考えております。

続きまして、3月9日に行いました北海道開発分科会における主な意見になります。こちらのほうに載せております意見は、今回、素案を作るに当たって、大いに参考にさせていただいた意見をピックアップしておりますので、幾つかご紹介したいと思います。

まず、4ページです。計画全般のところでは、委員の皆様からおおむね評価をいただいたと思っておりますけれども、リアルとデジタルのハイブリッドの部分に関する意見を幾つかいただいたところでございます。それから食料安全保障の関係では付加価値ですとか、食の高度化、それから食文化を考える上での自然環境や文化的景観のメリット、こういったご

意見などをいただいたところでございます。

5 ページ目になります。観光立国の部分では、文化、自然、環境の価値の保全、保護、活用によって新しい価値を創造・育成するサイクルが大事だといったようなご意見。それから、ゼロカーボン北海道に関しては、再生可能エネルギーの導入と自然環境や観光資源としての景観との調和に関するご意見をいただいたところでございます。それから成長産業の部分では、最先端の半導体の拠点整備に関するご意見がございました。

それから6 ページ目になります。グリーンインフラの活用ですとか、北方領土隣接地域及び国境周辺地域の振興、それからアイヌ文化、北海道新幹線の札幌延伸に関するご意見についてもいただいているところでございます。

続きまして、地域の皆様との意見交換になります。それぞれ意見交換の概要については参考資料4、それから5に掲載しておりますので、後ほどご覧いただければと思いますが、分科会と同様に、こちらのほうには今回の素案作成に当たって大いに参考にさせていただいた意見をピックアップしておりますので、幾つか紹介させていただきます。

まず、9 ページになります。計画全般のところでは、理念の共有化ですとか、表現方法、教育に関するご意見をいただいています。それから食料安全保障、農林水産業の関係では、業種に関わるお話ですとか、農地に関するご意見、農村景観に関するご意見などもいただいています。

10 ページ目、観光立国の部分につきましては、観光コンテンツの充実に関するご意見、ゼロカーボン北海道のところでは未利用資源活用に関するご意見、それから強靱な国土づくりに関してはインフラメンテナンスに関するご意見をいただいたところでございます。

北方領土隣接地域及び国境周辺地域の振興に関するところでは、北方領土の返還運動、それから隣接地域の振興への決意、あと国境周辺地域の安全保障ですとか、プレゼンスに関するご意見をいただいております。

続きまして、計画素案のご説明の前に、今回改めて第9期計画のポイントを整理いたしましたのでご説明させていただきます。

13 ページになります。まず、北海道の価値に着目いたしましたけれども、現行の第8期計画では食と観光を代表的な価値と位置づけてきました。昨今、ウクライナ侵略ですとか、コロナ禍など、外部環境の急変がございましたけれども、食料安全保障、それから観光立国の再生といった観点で、引き続きこの2つの価値については維持していく必要があると思っております。

一方、2050年カーボンニュートラルを達成するためには、北海道に豊富に賦存する再生可能エネルギーを最大限活用する必要があるとしまして、新たな3つ目の価値として脱炭素化を位置づけて、食と観光を含めて北海道の価値を再構築してございます。これらを中心としまして、北海道の価値をいかに発揮していくかといったようなところを目標1の施策展開につなげています。

次に、「価値を生む空間」に着目いたしました。これは3つの価値を中心に、主に北海道の地方部にこういったものが賦存しているわけでございますけれども、「二重の疎」といった特殊な地域構造ですとか、積雪寒冷といった厳しい自然環境の条件下において、いかに定住環境を維持していくかといったようなところが大きな課題でありまして、この課題解決が目標2の施策展開につながっています。

これらを整理いたしますと、北海道の価値をいかに最大化するかといったようなところが大きな着目点になろうかと思えます。生産空間の価値を創出するためには、その場に住民が続ける、それからその場に行くといったリアリティーをいかに維持していくか。一方、時空間の制約といった生産空間の弱点をいかにデジタルで補うか。この掛け合わせによる価値の最大化に向けての具体策、これこそが第9期計画の大きなポイントになろうかと思っております。

続きまして、計画素案の内容をご説明いたします。分科会にお諮りした中間整理からの変更点として整理しておりますので、本文よりもこちらの資料2を中心に説明させていただきます。

16ページ以降になります。まず、体裁でございます。中間整理のときは箇条書で整理しておりますけれども、今回は文章形式としております。ただ、第4章の施策の部分については箇条書のほうが分かりやすいということで、重点的に取り組む施策のみ箇条書で整理しています。

冒頭、橋本からもお話ししましたように、名称は「新たな」から「第9期」に変更させていただきます。

それから今回の計画に込めた思いですとか、我々のメッセージのようなものを前書きの形で本文の冒頭に追加しております。これはこれまでの計画にはなかった試みでございます。本文でご紹介させていただきます。

資料3の1ページ目になります。最初の部分にあえて第1期の北海道総合開発計画の文言を引用させていただいております。それから昨今の、先ほども申しましたようなウクライ

ナ情勢ですとかコロナ禍といった変化を踏まえまして、再び北海道開発がクローズアップされているんだというなところを第1期の言葉を借りつつ記載しております。

それから、中段の部分について、今回の計画は、生産空間を含めまして北海道独特の地域構造ですとか、特徴や課題を踏まえたビジョンであるというようなことを挙げておりまして、最後に、多様な主体、いろいろな方々と共に北海道の未来を創っていくんだということをこの計画の中心的メッセージとさせていただいた。このような趣旨の前書きを書かせていただいております。

資料2に戻ります。16ページになりますけれども、目標の部分、中間整理では食料安全保障、脱炭素化、観光立国という順番でしたが、先ほどの3つの価値に合わせまして、食料安全保障、観光立国、それから脱炭素化については名称を「ゼロカーボン北海道」に変更して順番を多少入れ替えたということです。主要施策の名称につきましても多少変えておりますけれども、いただいた意見を踏まえまして表現の適正化を図ったところでございます。

続いて、17ページになります。計画の進め方の部分でございまして、デジタル技術の活用によって、様々な産業を支える人材の育成・確保が可能となるというような趣旨。それから、未来を担う子供たちへの教育ですとか、成長産業分野への投資、北海道開発の新しい価値や付加価値を創造する人材の育成・起用について追記させていただきました。

続けて、第4章の個別の施策の部分でございまして、分科会や地域からいただいた意見を中心に施策を追加したり、表現を追記したりしております、幾つかかいつまんでご説明させていただきます。

18ページの部分、農林水産業に関する施策といたしまして、先ほど意見でありました業種に関する話ですとか、農地に関する記述を追記しましたほか、19ページにありますけれども、ブランド力の強化、人材育成、農山漁村の多面的機能に関する施策を追加させていただきました。

それから20ページ、観光に関する施策でございまして、観光コンテンツの充実、文化ですとか地域資源の活用に関する記述などを追記させていただいたところでございます。

続けて、21ページになりますけれども、ゼロカーボン北海道に関する施策では、景観や環境への留意、未利用資源の活用に関する記述を追記しております。それから、成長産業の形成のところでございます。前回の部会以降、次世代半導体産業の拠点整備に関する大きな動きがありました。分科会でもこの件に関するご意見をいただいております、成長産業の

形成の部分に経済安全保障に貢献する先端産業拠点の形成という項目を追加して、具体の説明についても記述を追加しているところでございます。

資料3の素案で該当箇所を説明いたします。27ページ目からの「地域の強みを活かした成長産業の形成」という項目になりますけれども、(2)のところに先ほどお話しした先端産業拠点の形成といったような項目を追加いたしまして、次の28ページ目の特に重点的に取り組む施策の部分で、製造基盤の確立ですとか人材育成、それから居住環境の構築、こういった施策を追加しております。それとデータセンターの立地促進に関しては、もともと(3)の部分に入っていましたが、今回、先端産業拠点形成の部分に記述して整理をさせていただいています。

また、資料2の22ページ目になりますけれども、自然共生社会・循環型社会の部分では生態系ネットワークや建設発生土に関する施策、それから北方領土隣接地域及び国境周辺地域の振興に関する施策では、少し緊迫化する国際情勢を意識したような記述を追加させていただきました。

23ページ目になります。第2節の部分ですけれども、道の駅の活用、予防保全型のインフラメンテナンス、インフラ分野のDXに関する記述を追加させていただきました。

最後、付記になります。これまでの計画でも本文の最後に付記といったものを記載させていただいておりますけれども、様々な状況下におきまして、現段階では明確に記述できないような状況につきましても、状況の変化に応じ弾力的に対処するという趣旨。それから北方領土をめぐる状況につきましても大きな変化があった場合には改めて開発の基本方向を考えていこうといったような趣旨を記述させていただきました。

素案の概要については以上になります。

ただいまご説明いたしました素案の内容に関しましてご意見を賜ればと思います。よろしく願いいたします。

以上でございます。

【真弓部会長】 どうもありがとうございました。

それでは、各委員の皆様からご意見を頂戴したいと思います。ただいま事務局の説明がありましたけれども、こちらを踏まえまして、ご意見がございましたらお願いしたいと思います。ご発言につきましては、これまでどおり挙手順とさせていただきます。ご発言のある方は順に指名いたしますので、挙手をお願いいたします。

ただし、途中でご退席予定の中嶋委員と長谷山委員におかれましては、最初に指名させて

いただきたいと思います。先ほどチャットで長谷山委員、14時20分から10分ほど退席されるということですので、長谷山委員がおられなかった場合には、挙手順でご発言をいただきたいと思います。

なお、これまで同様にチャットによる発言も可能であります。追加のご意見や補足、他の委員のご発言に対するコメントなどございましたら随時ご活用ください。

時間に限りがございますので、誠に恐縮ではありますが、ご発言はお一人4分程度でお願いしたいと思います。

それでは、まず、中嶋委員、お願いいたします。

【中嶋部会長代理】 中嶋でございます。順番を変えていただきまして、どうもありがとうございます。

これまでの計画部会で作成されました中間整理を基に、今回の第9期計画策定に向けて取りまとめられた部会報告素案の枠組みについては、異論はございません。改めて北海道農業の食料安全保障への貢献の意義を確認いたしました。それに関連して、少しでもコメントさせていただきます。

資料3の12ページで計画推進の基本方針を述べていただいておりますが、その9行目以降の目標1で食料安全保障とゼロカーボン北海道を並列して記述していることを改めて拝見しますと、農業生産が温室効果ガスの大きな排出源になっていることに留意する必要があると思われました。食料生産を伸ばしていけば、確実に温室効果ガスが増えてしまいます。このことは食料問題の解決に取り組む上で世界的な課題になっておりまして、北海道もその問題からは逃れられないと思います。

北海道で特に気をつけなければならないのは、家畜の消化管内発酵や家畜排せつ物からのメタンの排出だと思います。ただし、それらのメタン排出を削減するような技術も開発されつつあるので、それら技術の普及に積極的に取り組んでいただくことに触れていただければ幸いです。

具体には20ページに、(3)持続可能な農林水産業の展開という記述がございますが、そこで言及していただければと思います。20ページ目に重点的に取り組む施策の下に持続的な生産体系の構築のリストがあります。例えば温室効果ガスの削減のための技術開発と普及という項目を追加していただけるとよいかもしれません。

それからちょっと飛びますが、27ページに(3)北海道のCO₂吸収力の発揮という説明がございます。このページの9行目から重点的に取り組む施策のリストがありますけれ

ども、例えばここにバイオ炭の農地施用というような項目などを追加できないかどうかもご検討いただければ幸いです。

最後に、同じく資料3の29ページに自然共生社会の形成について記述していらっしゃいますが、そのページの26行目にネイチャーポジティブの考え方が追記されています。北海道ではこのことへの意識がますます重要になってくると思っております。農業生産においても、特に自然環境との境界に位置する場所で営んでいる農業では、特に生物多様性保全への配慮が求められるのではないかとこのことを最後に指摘しておきたいと思っております。

以上となります。ありがとうございました。

【真弓部会長】 中嶋委員、誠にありがとうございました。

続きまして、長谷山委員ですが、お戻りでしょうか。まだお戻りでないようですので、それでは、浦本委員、いらっしゃいますでしょうか。

【浦本委員】 はい、おります。

【真弓部会長】 それでは、浦本委員からお願いいたします。

【浦本委員】 ご指名いただき、ありがとうございます。北海道副知事の浦本でございます。真弓部会長をはじめ、委員の皆様には日頃から北海道の発展のために格別のお力添えをいただいておりますことを、改めて厚く御礼申し上げます。

さて、本日お示しいただきました素案では、第2章「計画の目標」の1つ「我が国の豊かな暮らしを支える北海道」におきまして、脱炭素化の文言をゼロカーボン北海道と変更していただきました。2050年のカーボンニュートラルの達成に向けましては、本道の強みである豊富な再生可能エネルギーを最大限に活かすことが重要と考えてございまして、環境と経済・社会が好循環するゼロカーボン北海道の取組は、こうした国としての目標の達成に貢献いたしますとともに、成長を牽引する産業づくりにも資する、全国で展開される地域脱炭素の先導役を担っていくものでもあります。このたび第9期計画に明確に記述していただきましたことに、心から感謝を申し上げたいと思っております。

また、本年3月に開催されました国土審議会北海道開発分科会におきましては、道から最先端半導体の中心的な拠点整備が円滑に進められますよう、計画への記載に当たりご配慮いただきたいと趣旨の意見を申し上げたところでございます。

このたびの素案では、第4章「計画の主要施策」におきまして、「地域の強みを活かした成長産業の形成」に向けた施策の基本的方向として、新たに「経済安全保障に貢献する先端産業拠点の形成」を項目立てしていただき、「次世代半導体の製造基盤確立、研究、人材育

成の拠点形成」に重点的に取り組むと明記していただきました。北海道の考え方をしっかり反映していただきましたことに、この場をお借りしまして感謝を申し上げます。

さて、道におきましては、国の第8期計画と計画期間を同じくいたします北海道総合計画に基づきまして、各種の政策を推進しているところでございますが、毎月10日に開催した知事の附属機関の北海道総合開発委員会におきまして、道の総合計画の推進状況とともに、北海道を取り巻く社会経済情勢の変化についてご議論いただいたところでございます。

委員の皆様からは、急激な国際情勢の変化などを背景に、エネルギーや食料の安全保障に一層貢献していかなければならないとの認識の下で、「いま一度、北海道のあるべき姿をしっかりと議論することが必要ではないか」といったご意見や、経済安全保障に関しまして、「ラピダス社による最先端半導体工場の千歳市への進出決定は、新たな基幹産業と雇用創出が大きく期待できることから、半導体関連産業の一大集積地を目指すことを総合計画の長期目標の1つとして設定した上で、人材の確保・育成、関連産業の立地支援、インフラ整備などにオール北海道で取り組んでいくべき」といったご意見をいただいたところでもあります。

道といたしましては、こうしたご議論を十分に踏まえ、今後、これまでの国における第9期計画策定に向けた調査審議過程にも十分留意しながら、総合計画の在り方について早急に検討し、その対応方針を明らかにしてまいる考えでございます。

北海道のみならず、我が国がエネルギーの安定的な確保や食料安全保障といった大きな課題に直面するなか、道といたしましては、今がまさにエネルギー、デジタル、食、観光といった北海道が有するポテンシャルを最大限に発揮しながら、我が国全体の課題解決に貢献していく重要な局面と考えてございまして、引き続き国の北海道総合開発計画としっかり連携をさせていただきながら、各般の取組を進めてまいる考えでございます。引き続き、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。発言とさせていただきます。ありがとうございます。

【真弓部会長】 浦本委員、ありがとうございました。

続きまして、長谷山委員、お席にお戻りでしょうか。お戻りではないようですので、続きまして、挙手のごございました篠原委員、よろしく願いいたします。

【篠原委員】 お疲れさまです。ホクレンの篠原でございます。

初めに、中間整理以降の様々な意見を踏まえて素案を整理いただいたことに感謝申し上げます。特に新しく加えられた冒頭の序文では、ポイントを明瞭簡潔に整理をいただいております。

りますが、今回の計画案のメッセージを伝える、とても大事な部分だと思っております。また、各所の意見も多岐にわたって、ご苦勞には相当なものがあったのかなとお察しをいたします。

食料安全保障の観点では、農業の様々な経営形態や地域の特色を踏まえた表現を盛り込んでいただくなど、具体的で実態を伴う計画になったと感じております。従来から抱えていた食と観光を近年のウクライナ危機やコロナ禍を踏まえて、改めて北海道の重要な価値と位置づけ、脱炭素、また、ゼロカーボンを新たな価値として加えることで、過去と今、そして未来に向けて一層筋が通った計画になったのかなと考えております。

食と観光は、農山漁村や環境を含めて密接に関わっており、この2つの価値を發揮するためには、その過程で環境面をしっかりと取り組むことが必要ではないかなと考えております。例えば、家畜ふん尿についてはバイオガスプラントで発電し、それを地域で使い、副産物である消化液等を農地に還元する循環型の仕組みが理想的ですが、送電網やいろいろな問題の中で、特に今は酪農経営が厳しいこともあり、コスト面での課題があるわけであります。こうした課題を乗り越えるには、産学官の様々な主体が力を合わせるが必要かなと思います。計画案にも今申し上げたことを盛り込んでおり、私どももしっかり取り組んでまいりたいと考えております。

最後に、これまでも述べさせていただいておりましたが、改めて物流の重要性についてご意見をさせていただきたいと思っております。序文で我が国に必要なものとして高い食料供給力が掲げられております。まさしくそのとおりだと思いますけれども、供給力ということは生産して終わりではなく、必要な場面、場所において必要なものを届けることができ初めて成立するものであります。特に北海道は食料基地として計画案にも記載をされておりますが、どの輸送手段が欠けても、北海道で生産された食料を全国津々浦々に届けることができなくなるわけであります。今回、新たに成長産業の拠点づくりが項目として加わったことも含めて、農業だけでなく、全ての産業や生活が成り立つためには物資を北海道へ運び、道内外に届ける物流インフラが必要不可欠だと考えているわけであります。地域との意見交換などでも貨物鉄道や物流に関するご意見が多く出ていることを踏まえると、やはりもう少し踏み込んで鉄道輸送の必要性について明記するべきかと存じます。

9ページの第2章第3節の2050年の北海道の将来像における将来像を支える社会基盤に新幹線や道路、空港、港湾などだけでなく、鉄道輸送もしっかりと明記して位置づけることを改めてご提案を申し上げます。

加えて、同じく第2章第3節の10ページ、進むべき方向性としては鉄道の明記がございますが、第4章の計画の主要施策では、36ページの人流・物流ネットワークにおいて空港や港、高規格道路の整備については記載があるものの、鉄道輸送の維持については明確には読み取れないのかなと思います。鉄道輸送については、輸送量当たりの二酸化炭素の排出量が大変少なく、通常のトラックの約10分の1と言われておるのでありますから、全ての輸送手段が重要ですが、鉄道貨物輸送については、環境や脱炭素の観点からも重要な社会基盤として認識される計画案にすべきかと存じます。みんなが負担すべきものは負担しながら、将来を見据えて物流インフラの在り方を論議していく必要があると考えております。再三の意見で恐縮ですが、ご検討をお願いしたいと思います。

私からは以上です。

【真弓部会長】 篠原委員、ありがとうございました。

続きまして、まだ挙手マークは出ておりませんが、ご発言のある方は挙手をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。いらっしゃいませんか。

ただいま長谷山先生が席にお戻りになられたようであります。長谷山先生、よろしければご発言をお願いいたします。

【長谷山委員】 戻るのが遅くなりまして申し訳ありません。北海道大学の長谷山でございます。

今回の開発計画の策定に当たって、前回は発言させていただきましたが、資料3冒頭の文章があまりにもすばらしく、感動いたしました。昭和26年に第1期北海道総合開発計画が策定され70余年、我が国の安定と発展に大きく寄与する地域となったことが書かれ、次にこの直近数年間に、我々は未曾有の危機を経験しながらも、北海道固有の生み出す力を備え続けて来たポジティブな点を取り上げ記載されています、これからの北海道が様々な難題に立ち向かって前進する気概を感じております。

それが机上の空論に終わらないように、第4章に計画の主要施策として我が国の豊かな暮らしを支える北海道を掲げ、具体的に、食料安全保障、観光立国、ゼロカーボン北海道の3つをしっかりと挙げています。この章では各項目の実施について具体性を持って記載しており、計画の冒頭の文章が現実のものとなると期待しております。

また、私の専門が情報系ですので、デジタル分野の視点からも述べさせていただきます。9ページ、2の将来像のところ、②に、「デジタルの実装で国内外から人を魅きつける多様な暮らし方が実現している」点や、戻りまして3ページに、「全国よりも10年先んじた

高齢化が課題となる中で、北海道開発を推進するために、デジタル技術を活用して連携・協働、課題解決を大きく迅速に進めていく」という力強い文章も含めていただきました。全体を通して、今の時代にあって、これだけ力強い前進の計画を北海道から発出できることに、作成頂いた皆様は大変にご苦労なされたであろうと思ひながら、心より感謝申し上げます。

以上、感想でございます。ありがとうございました。

【真弓部会長】 長谷山委員、ありがとうございました。

それでは続きまして、お手が挙がっております箕輪委員、よろしくお願いいたします。

【箕輪委員】 ありがとうございます。非常に多岐にわたる論点を全て網羅して、本当に大変なご苦労があったと思います。ありがとうございました。私から2点だけコメントをさせていただきます。

1点目は、11ページのところ、目標ですけれども、先ほど浦本委員からもお話しありましたが、脱炭素化というところをゼロカーボン北海道というところに変更したというところがございました。変更すること自体については、特に意見はないんですけれども、もし変更するのであれば、ゼロカーボン北海道とはというものをどこかにしっかりと注記したほうがいいのではないかとというふうに、この報告書の中でそれをどこかに記載したほうがよいのではないかと思います。それが1点目です。

2点目は、これは感想ですが、13ページ、リアルとデジタルのハイブリッドという中で、13ページの下から4行目のところで、「また、仕事や教育等をオンラインで実施することによって様々な産業を支える人材の育成・確保が可能になる」と書いていただきました。当初からコメントしたリアルな生活空間維持のための人材確保というところをデジタル活用で実現するという縦の関係が補完できていて、すごく分かりやすくなったと思いました。ありがとうございました。

私からは以上です。

【真弓部会長】 箕輪委員、ありがとうございました。

続きまして、ご発言のある方、挙手をお願いします。いかがでしょうか。

それでは、お手が挙がりました白糖町長の棚野委員、よろしくお願いいたします。

【棚野委員】 白糖町長の棚野でございます。皆さん、大変ご苦労さまでございます。

私は、北海道町村会の立場で発言をさせていただいてきているわけですが、冒頭から申し上げてまいりましたけれども、やはり北海道は一次産業あつての北海道、一次産業に笑顔が

輝いてくると観光が大いに変わっていく。この4本柱をしっかりと今回の総合計画の中では進めていただきたい。加えて、やはり大事なのは総花的ではなくて、道民が「よし、これであれば、この目標に向かって頑張るぞ」と言っただけのような、思えるような、そういうテーマも必要だというお話をさせていただきました。

そんな中で今回の素案を見ていて、本当に皆様方のご苦勞に感謝を申し上げたいと思っております。ご案内のように、時あたかもであります、世界の状況の中で食料とエネルギーの安保が叫ばれるようになりました。まさしくこれは北海道が担わなければならない時代を迎えたわけでありますので、より一層、国家国民のために北海道が一次産業、あるいはまた観光も含めて頑張らなければいけないという、その後押しにもなってくるのではないかなと思っております。

我々は町村会でありますから、実行部隊だと思っております。我々町や村がこの総合計画に基づいて、どう頑張っていくかということにかかっているわけでありますので、先ほどから出ていますように、当然、一次産業、農業・漁業・林業があつて観光がある。その中で食料ということ1つ取っても、やはり今、脱炭素、温暖化の問題をどう捉えていくのか。あるいはまた、デジタルもそうですが、とにかく今、我々北海道を挙げて環境というレベルの中で全てを融合させていかなければならないと思っております。

例えば、農業においても漁業でもそうなんです、生産活動、経済活動を起こすとCO₂が出ます。メタンが出ます。しかし、それは出るんですけども、その過程といいますか、それは出るものがどういうようなことをすることによってCO₂が出るのか、どういう貢献をしているのかということをしっかり我々はPRをしながら、説明をしながら、その結果、出るもの以外のものにどう貢献できるのか。あるいはまた、再生可能エネルギーでどういうふうに貢献できるのか。さらにはまた、森林が豊富ですから、そういうものを循環させることによって、それ以上の効果を出していけるのかということを含めて、大事なのは環境というテーマを全ての経済活動に融合させていくということを取り組んでいけば、北海道の優位性をしっかりと表に出しながら、道民挙げて、よし、頑張っていこうという方向になるのかなと思ってきたものですから、そういう意味では、この意義についても、目標についても、主要施策についても、そういうことが十分配慮された素案になっているということで頑張ろうということは今考えておりますので、本当にご苦勞さまでございました。ありがとうございます。よろしく願いいたします。

【真弓部会長】 棚野委員、誠にありがとうございました。

続きまして、挙手マークがついております、本日リアル参加いただいております矢ヶ崎委員、よろしく願いいたします。

【矢ヶ崎委員】 矢ヶ崎です。発言の機会をありがとうございます。

私は観光が専門でございますので、資料3、本文のところの主に観光の部分について3点、お話をさせていただきたいと存じます。まずもって項目的にも内容的にも観光の分野を非常に丁寧に体系的に記載をしていただきまして、国土審議会としての内容としては、本当にそのとおりだなと思って拝見しております。全体的に全く異議のないところであります。

その中で少しコメント、補足をさせていただきたいと存じますが、まず、資料3の22ページの25行目に「北海道の優位性を活かしたMICE誘致」というのがありまして、ここなんです、昨今、MICEのニーズの戻りも非常に早うございます。そして、コロナの中でハイブリッド開催を経験したのですけれども、やはり対面がいいと、リアル参加がいいということで、おおよそ今、都会、東京辺りに来ているニーズで、対面開催したい8割、ハイブリッド開催したい2割みたいな、対面に急激に戻ってきているという状況です。

そして、MICEの中でもMとIの需要が非常に力強いと。特にIにつきましては、インセンティブ・トラベルということなんですけれども、世界的に人材不足です。優秀な人材を企業の中につなぎとめておくために、海外の企業においてもコロナ禍において物品の提供であるとか、代替手段を用いましたが、一緒に旅行に行ってチームワークを確認するといったインセンティブ・トラベルに如くものはないという結論が多くの企業において、国際的な企業においてなされているということに灰聞しております。こういったことをチャンスと捉えて、豊かな資源を持つ北海道の中でMとIをしっかり取り込んでいただけると、非常に北海道の未来にも役に立つのかなと考えたことが1点です。

それからもう一つありまして、2つ目は、23ページの33行目にサステナブルな観光地域づくりを目指すということで国際認証の取得などという言葉を入れていただきました。大変これも重要なポイントであります。これに加えまして、国際認証の前に観光庁さんがサステナブルガイドライン日本版を作っておりますので、これを取得した上で国際認証、できれば具体例を挙げて、観光立国推進基本計画の中に具体例が挙がっておりますので、その例を挙げておいていただき、これらを北海道は率先して取りましょう、そういうことの中に、観光分野においても環境、カーボンニュートラルに役に立つことがいっぱいあります。例えばフードロスですとか、そういったことにも対応していくということも可能です。

加えまして、北海道においても顕著だと思うんですが、域外からの投資がかなり盛んにな

ってくるということがおこっております。そういった海外及び別の地域からのホテルを建てる、何をするというような投機に関して、自分たちの地域のルールを守っていただくんだ、うちの地域はこういうサステナビリティを大事にしているんだということを説明するという観点からも、やはり日本版のサステナビリティガイドラインを取得しています、国際認証を取っています、だからこういう地域として考えてくださいというようなこともお話ししていけるのではないかなと思っている次第です。

3つ目、最後であります、24ページ、19行目です。観光を支える担い手の育成・確保というところもしっかり書いていただいて、ありがとうございます。ここに記載されている内容に加えまして、産業そのものの担い手が非常に厳しいです。供給制約がかかっている状況です。全国の宿泊事業者の中で、人手が足りているというところはほとんどなくて、人手がないがゆえに部屋を100とすると、70から75の部屋しか営業できないといったような状況があります。これはもちろん事業者個人が個々の経営者であるし、業務改善や構築をして、そして待遇改善を行って人材確保をしていく必要があるのですけれども、既に1つの企業ではなかなか対応し切れない状況ではないでしょうか。地域全体でいい人材を確保していくというような体制を考えていくということが早晚やってくるのではないのでしょうか。そうでなければ地域の中において人材の取り合いということにもなってしまう。そういうところを地域全体で人材確保というものをどうしていくか、これを真剣に考える北海道であっていただきたいかなと思っております。

以上です。ありがとうございました。

【真弓部会長】 矢ヶ崎委員、ありがとうございました。

続きまして、手が挙がっております高橋浩晃委員、よろしく願いいたします。

【高橋（浩）委員】 北海道大学の高橋でございます。事務局には本当に様々な意見を取り入れる形でまとめていただきまして、ありがとうございました。

今回、地方会議とか地域との意見交換、いろいろなお話を聞いて、地域ごとにかなり課題が様々であるということを改めて感じた次第です。きちんと地域性ということを考慮していくことが重要なのではないかと思います。この取りまとめ自体は非常に目標がクリアになったと思いますので、今後は個々の施策をどうやってつないでいくのかということになるのかなと思います。

13ページに計画の進め方というのがあるんですけども、具体的にどういうふうに魂を入れて動かしていくか。そういうような具体的な検討もそろそろ考えたほうがいいのか

などと思います。具体的に今回の計画というのは、国交省の所掌以外の内容もたくさん入っているわけでありまして、省庁間とか、あるいは道とか自治体との連携を具体的にどういうふうに進めていくのか。いわゆる実施体制が重要になってくるのかなど。具体的には実施部局の機能の強化、具体的にどういうふうに強化していくのかということについてもそろそろ具体的なイメージを考えていく時期なのかなと考えています。

特に、先ほど申し上げましたように、地域ごとに課題が違っていると、それにも対応せざるを得ないし、一方で地域ごとをつないで初めて北海道のポテンシャルが上がってくるということになりますので、司令塔の機能ですよね。やっぱり誰かが引っ張っていくと、どこが引っ張っていくんだということがクリアにならないと、なかなか具体的に動かないのかなと思いますので、そういうような体制の整備の目途、これも今後の検討の中でぜひ具体的に検討していただきたいと思います。

最後になりますけれども、こういうふうな新たな計画を進めるのも非常に重要なんですけれども、きちんと足元といいますか、道路とか、あるいは防災対策、こういうことについても着実に進めていただくということが非常に大事だと思いますので、そういうようなことも含めた形で、実務的な長中期的な実施体制の検討を進めていただければと考えております。

私からは以上です。ありがとうございます。

【真弓部会長】 高橋委員、ありがとうございました。

続きまして、ご発言のある方、挙手をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

それでは、石黒委員、お願いいたします。本日リアル参加でございます。よろしく願いいたします。

【石黒委員】 北海道大学の石黒でございます。発言の機会をいただき、ありがとうございます。

私からは大きく3点申し上げたいと思います。

1点目ですが、まずは全体として、僭越ながら、非常にバランスよく、そして観光という広範な内容を緻密にまとめたいただいたというふうに評価させていただきたいと思っております。特にCX、あるいはデスティネーション・イメージ、財源論など、今まであまり触れられてこなかったテーマ、あるいは非常に新規性の高いテーマについても果敢に記述いただいた点は、観光の分野の専門家として大変にありがたく思っております。

その上で、2つ目です。私も特に冒頭の前書きについては、非常に感銘を受けました。他

方で、定住環境に焦点を当てた記述になっているということについては重々理解をしておりますが、柱のうちの1つが観光であるということ、そしてその顧客に道外、国外からやってくる人が含まれるということ踏まえ、例えば31行目辺りに、定住環境の豊かさがディステーションとしての競争力につながる、あるいは観光目的地の持続性につながるといったような文言を入れていただくと良いのではないかと考えました。全体としては定住環境にフォーカスしつつも、それがなぜ観光という柱につながるのかというところを、少し補強いただけるとありがたいと思ったというのが2点目でございます。

3点目は、観光に特化した24ページのところでございます。一つは、まさに先ほど矢ヶ崎先生が言及された、担い手についてです。観光を支える担い手の育成、地域づくり、まちづくりということで、かなり地域を意識した記述にさせていただいておりますけれども、私もやはり産業界、特に観光産業分野におけるバックアップ、多様な人材の確保、あるいはそのための支援ということを書いていただくことで北海道の観光を支える産業界への大きなメッセージになるのではないかと思います。可能であれば、そういった産業界への指針、方向性を示すような記述を加えていただけるとありがたいと思っております。

また、オーバーツーリズムの定義が、今の脚注では影響ということになっておりますが、専門的には影響ではなくその結果として生じる状況を指してオーバーツーリズムというほうが一般的だと思います。

私からは以上です。

【真弓部会長】 石黒委員、ありがとうございました。

それでは、ご発言のある方は挙手をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

それでは、藤沢委員、よろしく願いいたします。

【藤沢委員】 挙手が遅くなり申し訳ございません。

ほかの先生もおっしゃっていたように、まとめていただいた内容については大変素晴らしいものと思っておりますし、私も特にはじめにのところの冒頭の部分は大変覚悟のある素晴らしい、過去を振り返るお言葉があつて、素晴らしい始まりだなと思つて拝見しておりました。ですので、大きく意見があるわけではないのですが、あえて何かを申し上げますと、先ほど矢ヶ崎委員から観光面において、海外のホテルなど海外資本からの投資について、地域が磨いてきたサステナビリティ、こちらの考え方をしっかり守ってくださいというご指摘があつて、これに強く賛同するものであります。

その上で、ここに少しでもコメントさせていただくとするならば、やはり海外資本が北海

道でブランドが上がれば上がるほど参入してくるわけですが、この点において2つお願いしたいことがあって、1つは、やはり北海道というのはもともと地域を何とかしたいという思いで頑張ってきたNPO的な方、また起業家的な方がいらして、その方々がブランドを高めてきたところに海外の方がいらして、一部反対をしていたような人も含めて、土地所有者が高いプレミアムで土地を売却するというようなことで、結局、クリームスキミングみたいなことが起きている。チェリーピッキングとか、いいとこ取りとか、そういうことが起きてしまうことというのはありがちなので、やはりこれまでの地域のブランドをつくってこられた方々への配慮を持って地域の土地利用の計画を考えていただきたいということが1つと。

もう一つ、どんどん海外の資本が入ってくることはよいことでもある一方で、やはり安全保障的に土地が誰に渡っていくのかというのもしっかり見ておかななくてはいけないと思いますので、地域の土地利用計画において安全保障の観点というものに留意しながら計画を立てていっていただきたいという、この2点をお願いしておきたいと思います。

以上、どうぞよろしくお願いいたします。

【真弓部会長】 藤沢委員、ありがとうございます。

それでは、ご発言のある方は挙手をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

それでは、北委員、よろしくお願いいたします。

【北委員】 北海道大学の北でございます。私も今回の素案につきましては、特に大きな異論はございません。これまでの食料安全保障、観光立国の強化に加えて、今回新たにゼロカーボン北海道ということを目指してしっかりと位置づけていただいているというところで、非常に特徴的な内容になっているかなと思っております。

また、実現に向けた基本的な方向としても北海道の地域特性を活かした脱炭素社会の形成ですとか、エネルギー基地の形成、北海道のCO₂吸収能力の発揮という3つを掲げていただいて、実現可能で、また将来性のある具体的な施策が挙げられているのではないかなと思いますので、高く評価させていただければと思います。今後は、これらの施策について、どのような優先順位で、どのように実行していくのかというマイルストーンを明確化していただいて、確実に実行に移していただければと思います。

1点コメントをさせていただくと、7ページの北海道の資源・特性の中の3番目のところでエネルギー・資源というのがありまして、ここに「北海道には、風力、太陽光、地熱等の再生可能エネルギーや水資源が豊富に賦存している」ということが書かれているんですけ

ど、この1行だけしか書かれていないので、何かほかのところに比べると少しボリュームが足りないかなと思います。なので、ここについて、例えば国のいろいろな動きが今いろいろなところで進んでおりますので、そういった実態をここのところに反映させていただければと思っております。

例えば、国の洋上風力の産業競争力強化に向けた官民協議会では、全国の洋上風力導入目標45ギガワットのうちの北海道は3分の1の15ギガワットとされておりまして、全国で最大のポテンシャルを有するということですか、あるいは国の電力系統の広域連携系統のマスタープランの検討委員会におきましては、2050年の電力系統において、北海道から東京エリアに送るためにHVDCが必要で、その増強規模は北海道から東北の間で600万キロワット、東北から東京の間で800万キロワット程度が有力であるとされていることですか、あるいは経済産業省と国土交通省では道内で洋上風力発電の受入れ準備が進んでいる5つの地域を整備に向けて関係者が具体的な検討に入る、その有望区域に選定したということに記載するなど、そういった具体的なものが進んでいるんだよということを示していただくと、それに基づいた今回の計画になっているということが明らかになるのでいいのかなと思いました。

以上でございます。ありがとうございました。

【真弓部会長】 北委員、ありがとうございました。

それでは、ご発言のある方、挙手をお願いいたします。いかがでしょうか。

加藤委員、よろしくをお願いいたします。

【加藤委員】 加藤です。よろしくお願ひします。

これまでの議論を踏まえて、きれいにまとめられているなという印象です。特に異論ございません。ただ、これをいかに具体化していくのか、どう動かしていくのか。その動かしていく力をどう育ていくのかというところが次の重要なポイントになると感じました。

その観点から3つです。まず1つは、動かしていこうと思うと、外からの国の支援というのはもちろんありますが、北海道の内側の力をいかにコーディネートして大きな力にしていくのが非常に重要なポイントのような気がします。今日のこういうこれまでの議論は、どうしても北海道の細かい地域特性まではきちんと見切れていない、まだ見えていないものがあるような気がします。そういう意味では、北海道に住まわれている、活躍されている人たちが自分たちの地域特性を踏まえて、地域発のアイデアを育て上げる。そういう場があって、そういうものに対して、国がきちんと支援して実現するところまで持っていく。そう

という仕組みが今回の計画とセットで準備されているといいと思いました。これが1点目です。

2点目が、新しく半導体の工場も入ってきます。エネルギーの地産地消というのが非常に重要な資源という気がしました。地産地消がある程度実現できると、北海道では再生可能エネルギー主体になりますので、エネルギー供給の安定性、エネルギーの価格の安定性というのが新たな北海道固有のアドバンテージになっていくのではないかと。それを核にして新たな産業を育成していく、そういう考え方もあると思いました。これは私の専門外の話ですが、専門家の方にぜひそこを議論いただければと思います。

加えて、地産地消ができると、災害を乗り越えるという観点で非常にいいことです。津波災害が危惧されている中で、恐らく孤立するエリアというのが非常にたくさん出てくると想定されます。それに対して支援する能力というのは限られていますので、そういう状況を踏まえると、災害を、助けに来てもらうまでの間、耐え切る環境をそれぞれの地域でつくっていく必要があると思います。そのためにはエネルギーの地産地消、脱炭素と兼ねてレジリエンスを高めていくと、そういう発想があると、なおいいかなと思いました。

それから3点目が、これは地方会議の中でも議論されていたようですが、北海道で住まわれている方、活躍されている方々が誇りとか自信、ある意味、日本の最先端を走っているというような、そういった自信が育まれるような状態をつくり出していくということが非常に重要だと思っています。

私自身、徳島県の伊座利という陸の孤島の100人の漁村集落にサテライト研究室を置かせてもらっています。たった100人なんですけど、かなり先駆的な取組をされていて、最初、視察で行ったときには、集落の漁協の方がたまたまいまして、その方から声をかけられたときにすごいなと私は思ったんですけど、普通であれば、東京から視察に来ました風情で私おりますので、「視察ですか、お疲れさまです」ぐらいのことをおっしゃるかなと思ったたら、そうではなくて、「東京の価値観をうちに持ち込んでも意味ないからな」ということをおっしゃったわけです。つまり、自分たちのやり方とか生き方というのに相当な誇りを持っていると。そこまで地元の人が達するともものすごく大きな力になるという気がいたしました。

以上です。

【真弓部会長】 加藤委員、ありがとうございました。

続きまして、お手が挙がりました箕輪委員、よろしいでしょうか。

【箕輪委員】 すみません、一言だけ、先ほどのコメントで申し上げたいことがございまして、もう一度手を挙げさせていただきました。先ほどゼロカーボン北海道の注記ということでお話ししましたが、すみません、5ページに注記が記載されていることが分かりましたので、そこは忘れていただければと思います。

以上でございます。

【真弓部会長】 箕輪委員、ご丁寧にありがとうございました。

続きまして、ご発言のある方、挙手をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

ご意見をまだ頂戴しておりません、小谷委員、村木委員、山崎委員、もしご発言がございましたらお願いしたいと思います、いかがでしょうか。

【小谷委員】 小谷です。

【真弓部会長】 お願いいたします。

【小谷委員】 改めまして、新しい北海道の計画、希望に満ちた充実した内容になっていると受け止めました。まとめていただきまして、ありがとうございます。

感想は、改めて農業と観光と環境というのはつながり合っていると思いました。個別にはそれぞれビジョンが書かれていますけれども、改めて農業と農村を観光の面からも、環境の面からも連携して考えていくことが大事だと思いました。特に、例えば20ページのところですけれども、気候変動とか持続可能について書かれていましたが、持続可能な農林水産業の展開の重点的なところで気候変動への適応というのがありました。この4つの点を見ますと、新しい技術ですとか、新たな作物というのが目立つ感じがするんですけれども、農業において最も基本的な環境への適応・対策というのは、地域内で循環すること、適正規模で、適地適作で地域の中で資源を循環させていくことが、実は最も気候変動への脱炭素の対応もしていると思います。

特に北海道では畜産が大きな生産になりますけれども、別のところでは述べられていますけれども、飼料の自給、あるいは飼料を地域内で循環させていくということが重要だと思いました。その辺りは、ほかの項目では書かれているので、改めて気候変動のところに地域循環を加えるかというのは考えていただければいいかと思いました。言いたいことは、北海道の全体の計画なんですけれども、厳密に言うと、地域内で連携させていくこと、循環していくということが観光にも環境にもつながっていくと感じました。

以上です。

【真弓部会長】 小谷委員、ありがとうございました。

続きまして、村木委員、よろしくお願いいたします。

【村木委員】 ありがとうございます。特に追加、異論はございません。その上で申し上げさせていただきますと、ゼロカーボン北海道という考え方、この名称自体はとてもいいなと思って読んでいたんですけども、脱炭素のための再エネのポテンシャルというのは、北海道は本当に高いと思うので、その活用が高く位置づけられているということは非常にいいなと思いました。

ただ、創出されたエネルギーは一体どこで使うのかという着地のイメージがもう少しあっていいのかなと思ったんですね。例えば水素をつくったとして、それはどこで使うのか。道内の地産地消なのか、それともターゲットが日本全国なのか。そうだとすると、輸送のことも含めて検討する必要性があって、それはもしかすると、この次のことなのかもしれないと思うんですけども、書かれていることの実現方法とモニタリング、これが大事ななと思いました。

以上です。ありがとうございます。

【真弓部会長】 村木委員、ありがとうございました。

それでは、山崎委員、いかがでしょうか。

【山崎委員】 ご指名ありがとうございます。それでは、幾つかコメントさせてください。

まず、前回からの変化ということで、資料2の13ページに9期計画のポイントというところで計画の概要をまとめています。いろいろ出た意見というのを極めて簡潔かつ立体的に示して、非常に分かりやすいということがよく実感できました。非常に頑張っていたいんですけども、ただ、もう一点、申し上げさせていただくと、「1 他で代替できない北海道の価値」という表現について、何を意味しているのかは非常によく分かるんですけども、もう少し分かりやすい、すっと入ってくるような言い方に変えられるような言葉というか、概念というか、そうしたもので言い表すことができないだろうかというところを、計画が完成するまでに時間があるので、さらに検討していただければありがたいというのが全体についての意見です。

あと2点目としましては、実は私もこの間、地方自治体やそれ以外の民間事業者を含めて、ゼロカーボン政策をどのように進めているのかという現状と課題をいろいろなところを回ってお話を聞いたり、見させていただいてきました。そこで特徴的であるのは、受け止める側の地域の、現場の、特に地方自治体の差というのが非常に大きい現実がよく分かりました。脱炭素先行地域に指定されているような、非常に理想的なところもあれば、他方でそうした

再生可能エネルギーを明確に使えるような資源がないところ、さらにはそうした政策を進めることに追いついていないところなど、資源の有無、あるいは意欲の有無、能力の有無のばらつきが結構あります。

他方で、せっかく潜在的な資源があって、ゼロカーボン政策をもっと進められるところがあるところをどうやってキャッチアップしていくか、あるいは拡大していくかがこれからの課題になります。人であるとか、知識、ノウハウ、さらには生み出されたエネルギーというのをどういう形で、必要とするところと、されるところを結びつけていくのかというところと、あるいは格差をどういうふうに埋めていくのか。そうした広い意味での、陳腐化した言い方になってしまうんですけども、ネットワークをどのように形成していきながら、必要とするところ、されているところ、資源、能力、意欲のばらつきみたいところを埋めていくのか、ネットワーク形成の在り方をさらに深掘りしていただけたらありがたいと思っています。

簡単ではございますけれども、私からは以上です。

【真弓部会長】 山崎委員、ありがとうございました。

以上で皆様からご発言いただいたようでありますけれども、追加のご発言はございますでしょうか。もしおありであれば挙手マークをお願いしたいです。いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

特にないようですので、最後に私から一言申し上げたいと思います。経済界の立場から簡単に3点、お願いといたしますか、意見を申し上げたいと思います。

まず、資料2の14ページになります。こちらのほうで北海道地域構造として「二重の疎」がある。一方で、食・観光・再生可能エネルギーは、「二重の疎」の域に広く賦存しているということでもあります。この多く賦存しているという部分については、北海道のポテンシャルを説明する非常にいい表現だと思いますので、前向きに示す表現を、例えば資料3の3ページあたりに記載していただくと、非常に前向きに疎というイメージが捉えられるのではないかなと思います。ちなみに、北海道経済連合会では、北海道の疎を「恵まれた疎」と呼んでPRしているところでもあります。

2点目でありますけれども、北海道のポテンシャルを求める企業が非常に多くて、企業の立地促進、本文の資料3では、企業誘致という言葉はデータセンターの誘致のところしか出てこないんですけど、あとは立地促進という言葉になっていると思いますけれども、本社機能の道内移転、こういったものも数多く今積み重なってきているところでもあります。したが

いまして、この立地促進、北海道のポテンシャルを求めて来られる企業、この立地促進を促す、こういったものについても記載してはいかがかなと思います。例えば8ページ、②のところでもそういうふうに取り上げられるような表現もあるのですが、15ページ、フロンティア精神の再発揮の項目の中でもお示ししていただくことができると前向きになってくるのではないかなと思います。

そういう観点から見ますと、27ページ、こちらのほうに再生可能エネルギーを活かした産業振興というふうにあるのですが、今、本州の企業を中心に、北海道で再生可能エネルギーをエネルギーとして、つまり、RE100で事業を行いたいという企業の数も増えてきているように聞いております。先ほど来お話に出てきましたラピダス社、北海道千歳に進出を決めた大企業でありますけれども、あそこの製品もRE100、再生可能エネルギーをエネルギーとした製品、これでなければ物が売れないというようなことでもありますので、この再生可能エネルギーの活用を求める産業の立地促進、こういった観点の表現があってもよいのではないかなと思いました。

3点目でありますけれども、28ページになります。下の(3)になりますけれども、産業振興のくだりがありますが、34行目に「新しい産業を担う人材確保に資する環境整備」という表現がありますが、先ほどちょっとお話がありました、観光業界も含めて、様々な産業で人材の不足が今現場のほうでは起こっております。新しい産業だけではなく、既存の産業、こちらに向けての人材確保、環境整備としては非常に大切だと思いますので、この表現についてもお考えいただければなと思います。

私からは以上でございます。

《欠席の越塚委員からのご意見》

北海道の施策に「デジタル技術」を活用していく視点は極めて重要です。

都内の情報系の学生と北海道の情報系の学生の一番の違いは、アルバイトの無さ、と指摘されておりました。例えば、情報系の学生だとインターンやバイトを通じて自己のプログラミングスキルを高める経験になると思いますが、北海道はそれが少ないと思われまいます。オンラインで出来る仕事（バイトレベルでも）が増えると望ましいのではないのでしょうか。

デジタル技術の利活用部分においては、生活に必要なインフラ情報（医療・教育・介護）が最重要だと思われまいます、娯楽や文化的な情報に道内どこからでもアクセスできるような世界になると、地方部の「(仕事も娯楽も)何もない...」、といった取り残され感から脱却

できることにつながるのではないのでしょうか。

北海道＝豪雪地域であり、デジタル技術活用に場面においても、雪との戦いを制することが重要であると考えられます。そこで、“i－snow”など、除雪現場の省力化に関するデジタルプラットフォームをはじめとして、デジタル技術を使った除雪サービスの充実が期待されます。

デジタル技術の利活用について、他国との比較で考えると、北海道とフィンランドは気候条件もほとんど同じで似ており、フィンランドで便利であったサービスが、一つがバス・長距離列車（VR）内のWi-Fi等の無線通信環境です。北海道内の移動は時間がかかり、かつ車両を使ってでしか移動出来ない地域は多々あり、移動中にWi-Fi等の無線通信が使えると快適です。

全体として、北海道総合開発計画の全般的なトーンが、北海道内で閉じた印象がやや感じられる。北海道から他の都市へ、または他の都市から北海道もデジタル技術で繋がっているような姿があると望ましい。

《欠席の高橋（清）委員からのご意見》

計画部会の報告を拝見し、1ページ目の計画策定にあたって、の記述は、新たな総合開発計画を実現しようとする覚悟がわかりやすく、かつ、力強いメッセージとして示されていると思います。

特に「二重の疎」の克服は、リアルとデジタルの融合を示す格好のモデルとなり、「他に代替できない北海道の価値」をより高め、国内外に発信していくものと確信しています。

《欠席の吉岡委員からのご意見》

札幌市副市長の吉岡でございます。本日は都合により出席が叶わず、お詫び申し上げます。

本計画は北海道発展の基盤となる重要な計画であり、道内各地域の生産者や、自然、資源、エネルギーなどに支えられている札幌市としましては、引き続き計画の推進に向けて積極的に関わってまいりたいと考えております。

特に札幌市の持つ集客、消費、流通などの機能と、道内各地域が持つ食や観光などの資源を結び付けていくため、国とも連携し、都心アクセス道路整備や北海道新幹線の札幌延伸などにより、交通結節機能の強化を図ってまいります。

加えて、地球温暖化という大きな課題への対応として、エネルギーの一大消費地である札

幌市としましても、脱炭素に向けた取組を進め、ゼロカーボン北海道の実現に寄与してまいります。

今後も国や北海道と連携し、有識者の皆様からのご指導やお力添えをいただきながら、取り組んでいきたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。

なお私事ではございますが、このたび札幌市副市長を退任することになり、本計画部会の委員につきましても後任へと引き継がせていただきます。計画部会の委員及び事務局である北海道局の皆様におかれましては、これまで大変お世話になりました。

【真弓部会長】 続きまして、委員からのご発言に関しまして、事務局から追加の説明があればお願いしたいと思います。

【米津参事官】 参事官の米津でございます。

貴重なご意見をお寄せいただきましてありがとうございます。資料の説明のときにもお話しをしたんですけれども、前書きですね。今までの経過で、部会でのご意見も含めて、本当に多数の意見をいただきまして、我々としていろいろな思いをどのように計画本文の中に書こうかと試行錯誤したんですけれども、なかなか本文に表現し切れないようなことを、この前書きという形で整理させていただきました。総じて高評価といいますか、非常にお褒めの言葉をいただいたかなという、我々としても自信を持ったところがございますので、分科会に向けてブラッシュアップしつつ、しっかり計画にも位置づけていきたいと思っております。

それから、いろいろと記述の追加に関するご意見を多数いただいたと思っています。かなり地域の意見を含めて、幅広く漏れなく書いたつもりではあるんですけれども、なかなか気づかないところ、まだまだ足りないところがあると思っております、改めて本文の記述内容とも照らし合わせて、9回部会に向けて検討させていただければと思います。

それから、計画の実効性に関わる部分の話を幾つかいただいたと思っています。まさに今回の9期計画は、読んでいただいておりますとおり、地域ごとの取組というよりも北海道全体のマスタープラン的な意味合いを込めてつくっているものでございます。実際、行動に移していく段階では、本文の中にも少し書いているんですけれども、ある程度道内を地域ごとに区切って、そこでどういうふう施策を展開していくかというような地域ビジョンみたいなものを示していくことになろうかと思っております。特に地域で活躍されている方々をうまく活用したらいいんじゃないかというお話もございまして、そういった方々とうまく連携しながら実効性を高めていくような仕組みづくりについて、まさに今検討中ではござい

して、次回9回部会で我々が考えているイメージもお示しできればと思っていますが、引き続きその部分については考えさせていただければと思います。

もう一つ、モニタリングの話もいただきました。もちろん計画をつくって終わりではなくて、来年度以降、実効性をどう担保していくかについても、しっかり指標みたいなものをつくってモニタリングしていくようなことは考えていきますので、どこかの場で進め方みたいなものをご紹介できればと思います。いずれにしましても、7月18日の9回部会に向けて、今日いただいたご意見を基に素案を修正して、案という形でまたお示しさせていただきたいと思いますので、引き続きご指導をいただければと思います。本日はありがとうございました。

【真弓部会長】 どうもありがとうございました。それでは、ただいまの事務局からのコメントに対しまして、さらにご意見などございますでしょうか。ご意見がある方は挙手マークをお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

特にご意見がないようです。

それでは、委員の皆様には、本日は大変お忙しい中、ご参加いただき誠にありがとうございました。そして、本日も大変貴重なご意見を頂戴しました。重ねて感謝を申し上げたいと思います。

次回でありますけれども、先ほどお話しありましたとおり、7月18日を予定しており、第9回の計画部会、こちらでは本日のご意見を踏まえた案、これを調査審議することになります。事務局にはそこに向けての取りまとめをよろしくお願いいたします。

事務局に進行をお返しいたします。本日はありがとうございました。

【増田総務課長】 ありがとうございました。

最後に、北海道局長の橋本から発言させていただきます。

【橋本北海道局長】 お忙しい皆様、ご出席いただきありがとうございました。

現時点で41ページの計画案になっており、専門性の高い皆様から見ると足らざる部分もあろうかとは思いますが、全体としての「着地」にも様々ご配慮いただき、本当に感謝しております。

代表的には「ゼロカーボン北海道」という文言でしょうか。一般的には「カーボンニュートラル」であり、そちらを使うべきではないかというご指摘もあるかと思ひますし、そもそもこの言葉は、北海道の鈴木知事が打ち出されたものです。しかしながら、前書きにも記しました「共に北海道の未来を創る」を実践するとすれば、また考えとして何ら反するもので

はないとすれば、道庁さんが強くこだわられていらっしゃるゼロカーボン北海道という言葉に我々が歩み寄りたいたいというふうにも考えたところです。ご理解をいただいて、本当に感謝しております。

言葉の力は常に意識し、ワードのチョイスにも可能な限りこだわっているつもりであります。山崎先生ご指摘の「他で代替できない北海道の価値」についても同じですが、先生にもご意見を伺いながら、対応を考えていきたいと思っています。

それから、何人かの先生にいただきました、これをどう進めていくかという点では、実施部局の機能の強化というのがカギだと思っており、理念だけではなくて、動かしていく体制も並行して考えているところです。今年度内の閣議決定を予定しているのであれば、先回りして組織・体制も考えてまいりたいと考えております。

本日も大変勉強になりました。どうもありがとうございます。

【増田総務課長】 それでは、最後となりますが、次の第9回部会については、令和5年7月18日に開催予定です。詳細につきましては、改めてご連絡を差し上げますので、よろしく願いいたします。

以上をもちまして、第8回計画部会を閉会いたします。本日はありがとうございました。

— 了 —